

「社会という場の性質を考える - 争い(3 と 1/2)」

今回の授業では、前回の授業ノートを利用してミラーリング¹を行う。履修者の議論を中心として進める。

機能主義 - Grand Theory (p.1)

- ❖ 「社会は、AGIL という四つの下位体系から成り立っており、どこを切ってもこの図式が見られる」とは、4, 16, 64, ...というように、四つの下位体系もさらに四つの下位体系から成っているということ。
- ❖ 図中の矢印は、両矢印よりも2本の片矢印で書く方が一般的である。
- ❖ パーソنزのこの図式は、□社会矛盾を想定しておらず、□社会変化を説明しない。

機能主義 - Sociology of middle range (p.2)

- ❖ 問題点□に対する機能主義側からのアプローチで、「逆機能」の存在を指摘。
- ❖ 社会矛盾の存在は指摘するが、□社会矛盾がどうして発生するかは説明しない。

機能主義 - 青年期論 (p.2)

- ❖ 上記の問題点へのパーソنز自身の反応。
- ❖ 「世代間の断絶を機能的要件と見なす」というよりは、断絶とは、システムの機能要件である「Adaptation/外部への適応」と「Integration/内部の統合」との矛盾に発するもの。「断絶」はシステムの構造に根ざした現象であるということ。パーソنزによれば、とりわけこの断絶は世代間で生じる²。

葛藤理論 - (p.2)

- ❖ 社会矛盾が階級闘争を引き起こし、それが社会変化をもたらすという図式。

¹ ミラーリングとはアクティブラーニングの二大手法のひとつで、相手の発言を相手に向かって繰り返すことによって発言内容をより正確に理解すること。アクティブラーニングとは、人間は白紙状態/タブラ・ラサではなく、日常的・前科学的な知識を有していると考え、それを全く上塗りするのではなく、それに結びつけて学習する手法のこと。もとは物理学の用語である。その二大手法は、ミラーリングとモデリング。

² パーソنزが念頭においているのは文化的断絶であると思われる。例えば、個人主義的な若者が親を大切にしないとか、反権威的な青年が学校で不良をはたらくとか。J. デイーンの映画『理由なき犯行』はそういった断絶の典型である。

- ❖ マルクスによれば、支配関係は「虚偽イデオロギー」によって隠蔽される。権力者に都合のよいイデオロギーを学校や教会を通じて流布することで、多数の被支配者を「教化」し、それによって暴力による制圧に頼らずとも少数による支配の実態を隠蔽しているのである³。

Two competing major theories of sociology 再考 (p.3)

社会変化⁴について、それぞれの社会理論はどう見ているか？

これが議論のかなめとなる。

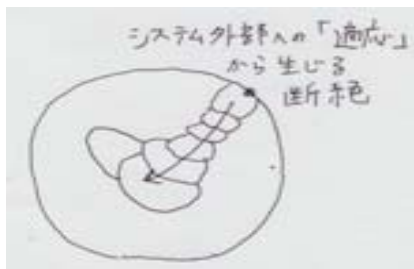
葛藤理論



社会変化は、「虚偽イデオロギー」によって隠蔽された、社会に内在する社会矛盾が引き起こす階級闘争によってもたらされる。

権力者は、イデオロギーの流布によって被支配者を拡張し、少数者を周縁化する。イデオロギーに隠蔽された社会矛盾の引き受ける少数者はそれに抵抗する。両者の均衡ラインは変動しうる⁵。

機能主義



社会変化は、システム外部への「適応」から生じた「断絶」を起点にしてもたらされる。「断絶」ないしは社会矛盾は、多数者によって黙殺されることもあるが、漸進的な⁶社会変化を引き起こしうる⁷。

³ 「虚偽イデオロギー」の典型は、例えば、アメリカの標榜する、land of opportunity、民主主義・共和制のイデオロギー。

⁴ 社会変化とは権力関係の変化と同値なのだろうか？ 議論全体を通じて、社会と権力関係は分かちがたく関連しているように思われる。しかし社会とは権力を通じた支配の構造であると置き換えても良いのだろうか？

⁵ 軍事独裁の社会では、この均衡ラインの円環の直径は小さくなり、より多くの人々が権力によって周縁化されることになるだろう。例えばミャンマーは、祖国の父の娘すら投獄してしまう。こういった政権は、イデオロギーによって多数者を拡大することよりもむしろ、軍や警察による力による支配を試みているのである。

⁶ 葛藤理論と機能主義では、想定する社会変化の様相も異なっている。例えば劣悪な労働環境という社会矛盾があった場合、葛藤理論なら、ラッドライト運動や労働組合による労使交渉によって、労働者は多数者が隠蔽する社会矛盾を暴露しようと反抗する。機能主義ではむしろ、工場法の成立のような漸進的な社会変化によって社会矛盾は吸収され、社会は再び調和を取り戻す。

⁷ 残念ながら、社会矛盾のすべてが社会変化をもたらす緩やかに解決されるわけではない。例えば日本政府は、原発廃止を求める声は「いつのまにかいなくなって」欲しいときっと思っている。もちろん

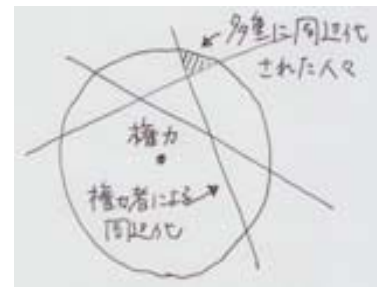
機能主義社会モデルは調和を前提としているので、「断絶」は外部システムとの接点から生じる)

両者の違いはどこにあるのか？ (p.3)

- ❖ 「(1)社会の中には常に多数者と少数者の葛藤関係がある」「(2)その力関係は流動的で変化する」という2点は、社会において観察される事柄である。これを説明するという社会理論としての条件は両者とも満たしている。
- ❖ 両者の違いは、このような葛藤関係や社会変化がどのようにもたらされるかという点にあり、その点に関しては両者は明らかに相容れない。しかし、だからといって一方が正しくて一方が間違っているというよりは、どのような社会を説明するかによって、用いるのに適した理論が異なってくるという見解が一般的。

しかし機能主義には問題点が...(p.3-4)

- ❖ 社会には、「多重に周縁化された人々」の存在が観察される⁸。彼らの存在を説明するのは、中心の存在する葛藤理論モデルでなければ不可能ではないか。
- ❖ 「多重の周縁化」と権力モデル



- ウェーバーの権力の定義（相手にとって不利益なことをさせる能力）は簡明だが、実際に権力の行使を特定するのは難しい。そもそも相手にとって不利益かどうかは誰が判断するのか。同意と強制の境界はどこにあるのか。権威による同意は権力の行使なのか。
- 政治学になじみ深い非ゼロサムの権力観は、結局権力について語っていないのではないか。パーソンズはゼロサムの権力観を一貫して否定してきた。非ゼロサムの権力とは、empowermentのpowerに象徴されるように、何か目的を達成するための手段として付与されるものである。誰しも多かれ少なかれ

ん成功例もある。マーティン・ルーサー・キングやハーヴェイ・ミルクの運動は社会矛盾を解消するような社会変化に結実したと言えるだろう。

⁸ 例えば、川崎の桜本には在日韓国朝鮮人やフィリピン人が多く居住しているが、彼らは移民として周縁化されているだけでなく、住環境の面でも周縁化されている。工場跡地を不法占拠したようなその土地は、下水がなく、消防車も入れない。高速道路に隣接し、排気ガスや騒音公害とも隣り合わせである。原発事故の避難民も多重に周縁化されている。そもそも富裕層の住まう六本木であれば原発が建設されることなどありえないのである。

有していて、誰かに奪い取られるようなものではない。しかしこのような power は能力とは呼べても、果たして「権力」と呼べるのか。

- 一般不可能性定理⁹において、アローは独裁を「1人の人が、他の人がすべて反対したとしても、何でも決めることができる状態」と（狭く）定義した。様々なイシューに関する周縁化の境界線を、権力者が権力者に都合の良いように引いているのだとしたら、これこそアローのいう「独裁」に近い状態ではないか。
- ウェーバーのような2者間の権力観や非ゼロサム的権力観を採用すると議論の足元がぐらつくようだが、アロー的に「独裁」の定義を狭く画定したとしても（してこそ）、「多重の周縁化の議論」成り立つように思われる。

Arrow, K.J., 1951 [1963], *Social Choice and Individual Values*, New York: Wiley.
2nd ed.

ケネス・J・アロー（長名寛明訳）『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社, 1977

⁹ アローは、一般に、どのような民主主義の仕組みであっても、人々の選好によっては、独裁に陥る可能性を排除できないことを示した。ノーベル賞を受賞したこの数学的論証を説明することはこの授業の範疇を超える。詳しくは、『「きめ方」の論理』（佐伯胖、1980、東京大学出版会）などを参照。